

レスが思考力を低下させていたけれど、あの『ショック療法』のおかげか、いまでは冷静さを取り戻している。

とはいえ、持ちかけられた話は即答するには重たすぎる。

「この話は、持ち帰ってすこし考えてみていいか」

穏やかに問いかけると、未直はこくこくとうなずいた。

「あつ、うんつ、ゆっくり考えて！」

直隆の言葉に、ほっとしたように未直が顔をほころばせたところで、ちょうどオーダーした品が運ばれてきた。

「お待たせしました。お手前、失礼いたします」

「ああ、こちらに——」

テーブルに拡げていた書類を片づけ、ふっと顔をあげた直隆は、そこで硬直する。

「あ」

トレイを持った相手もまた、小さな声をあげたきり、固まった。

直隆は、考えるよりも早く立ちあがり、威嚇するように彼を——『マキ』を見おろした。

この店とはとくに制服などはないようだが、カジジュアルなシャツの胸元にあるネームプレートには『名執真幸』なとりまさきの名が記されている。

とりあえず、ひとつ情報を得た。にやりと唇を歪め、直隆は尊大に顎をあげて名を呼んだ。

「ひさしぶりだな、名執くん」

「ああ、ははは。どうも、おひさしぶりです、真野直隆さん」

真幸はそう言うなり、冷たい笑みを浮かべたままグラスと皿をテーブルに置いた。その間、直隆との視線ははずさないままだ。

びしびしと火花が散るなか、未直だけが不思議そうに小首をかしげて驚いている。

「えっと……兄さん、知りあい？」

いかにも遊んでいるふうな真幸のルックスと、お堅い兄の姿を見比べる弟は、いったいどういうつながりがあるのかと怪訝けげんに思っているらしい。問いには答えず、直隆は真幸を睨みつけたまま、冷ややかな声で言った。

「未直、悪いがちよっと、さきに食事をしていてくれないか。わたしは彼と話がある」

「え？ う、うん。わかったけど、兄さんは？」

未直が問いかけると、マキ——真幸は、はっとした顔になった。意味のわからないその表情にはかまっていられず、トレイを手にした彼の手首をきつく握る。

「あとで食べる。……来てもらえるだろう？ 名執くん」

逃がすものかと力をこめると、なぜか真幸は怯えるでもなく、素直にうなずいてみせた。

\*

\*

\*

この状況で話し合いに適した場など思いつかず、とにかく腕を掴んで店を出た直隆は、ひとまず店の裏手に足を踏み入れた。

ひと通りのない薄暗い路地には、ポリバケツやビールの空き瓶などが並んでいる。

行き止まりのフェンスがある、奥まった場所に来ると、直隆は「このあたりでいいか」と足を止めた。振り返り、なにを思っているのかおとなしくついてきた真幸を睨みつけると、彼は小首をかしげてみせた。逃さないように、腕は掴んだままだ。

「ものすごい偶然もあったものだな」

「あは、うん。俺もびっくりした」

剣呑な顔の直隆に対し、真幸は軽薄な表情でへらへらと笑ったままだ。そのことにもいらだちを覚えながら、直隆は尋問でもするような口調で問いかける。

「きみはあの店でアルバイトをしているのか」

「そうだけど。なかに、身上調査？」

茶化してみせる真幸を睨みつけ、直隆は彼を捕らえたのとは逆の手を突きだし、押し殺した声で言った。

「携帯を出せ」

「なんでよ」

「いまなら、警察にも行かないで置いてやる。だからあの写真を消せ。わたしの目のまえで」逆らうようなら、出るところに出る覚悟はある。目顔でそう告げると、真幸は冷ややかな目に嘲笑を浮かべてみせた。

「警察に行つて、なにすんの？ 男に犯されましたって言うの？ 体裁悪いよねえ」

そんなことできつこないくせに——と、真幸はあざけるような顔をする。だが直隆は、しごくまじめな顔でうなずいてみせた。

「必要とあらば、そうするしかないだろうな。あのあと、一応調べてみたのだが、きみがわたしに対して行つた行為は、拘束しての強制的なセックスということで、逮捕・監禁罪か強制わいせつ罪に相当するだろう」

真幸は意外な言葉を聞いたかのように、「は？」と目をまるくした。かまわず、直隆はさらに言葉を続ける。

「ちなみに、例の写真を悪用し、こちらに対してなんらかの要求をしてきた場合には、脅迫罪もくわわるので、かなり厳しい罰則がつくが、それでもいいと言うなら——」

「えっ、ちよつ、待つて。あんた、マジで？」

「非常にまじめに話していることだ。そうした罪状がいやなら、いまずぐに写真を」

「じゃなくて、ホモに犯されたって、あんたも言われるんだよ。それでも警察行く気満々!?」

本気で驚いているような真幸に、直隆はだんだんいらいらしてきた。こちらがこれほど親切

に、ことを荒立てないでやると言っているのに、なぜそれがわからないのだ。

「だから、さっきからきみが写真さえ消せば、警察には行かないと言っているだろう。飲みこみの悪い男だな。これだけ譲歩しているのに、なぜ素直に聞けないんだ」

「いや、そこじゃなくってさあ。あんた、俺になにされたか、言わないといけないんだよ!」  
「当然だろう。被害届けも出さずにどうすればいいというんだ」

「じゃなくて……恥ずかしいの」

どうにも話が噛み合わない気がして、直隆はますます顔をしかめてしまった。穏便にすませやると言っているのに、なぜ言わずもがなのことばかり、真幸は繰り返すのだ。

「しかたあるまい。いい歳して酔っぱらい、はめられたことについては我ながら情けないと思うし、恥でもあるが、被害届を出す際には、詳細を語らねば意味がない」

「え……恥ずかしいのって、そこ……?」

ぽかんとしたような表情の真幸に、直隆は「むろんだ」とうなずいた。

「酒量もわきまえず、人事不省に陥るなど、いい大人がすべきことではない。ましてやトラブルに巻きこまれたのは自業自得でもある。できればことを荒立てたくもない。だがきみはわたしを脅している。そうした不安材料は、話しあいを取り除かれるならそれに越したことはないだろう」

真剣に言ったのだが、真幸はもはや啞然とした表情で、奇妙なものでも見るかのように直隆

を見ていた。そして、掴まれたままの自分の腕に視線を落とす。

「ていうか、気持ち悪くないの」

「なにがだ？ さっきから、きみは話を逸らしてばかりだ。結論はふたつにひとつしかないのだから、さっさと——」

言いかけたところで、突然腕を引っぱられた。よもや暴力に訴える気かと、見当違いの方向に身がまえた直隆は、不意打ちに奪われた唇に啞然とするしかない。

「なっ、なにをする!？」

ちゅっと、音を立ててすぐに離れたキス。やわらかく乾いた感触は、あの日にはいちども知らないままだった。焦って手の甲で口を庇うけれど「遅いよ」とおかしそうに真幸は笑った。

「もっかい俺と寝て、満足させてくれたら、消してあげてもいいよ」

「……は？」

真幸は直隆の肩に手をかけるようにして顔を近づけ、にやりと笑った。その笑みは、さきほどまで浮かんでいた、嫌味なものではない。だがなにか企んでいるような気配はする。

あぐくの果てに、真幸が口にしたのは、直隆にとってまったく意味のわからないことだった。「だからあ、俺ともういっかいセックスしたら、目のまえで消してあげるつつてんの」

直隆は顔をしかめ、いったいなにを言っているのかと、頭ひとつほど背の低い彼をうろんな目で見おろす。けれど、彼の表情は依然、にやにやとしたままだ。



「穏便にすませたいんでしょ？ 警察沙汰は俺もごめんだし、おにいさんもいやだよね？」

「まあ、そうだな」

「じゃ、寝てよ」

わざと軽薄に笑う彼の言葉を信じるに足る要素など、なにもなかった。腹立たしく、不愉快で、あっさりと奪われた唇に残るあましさえ、いらだちを誘う。

「交換条件はそれか？ なんのためにだ」

「んー、おにいさん、いいモノ持ってたし？ 俺、最近、男日照りだったし、こないだのエツチ、よかったし」

すると、細い指が頬を撫でる。眉をひそめはしたけれど、不愉快ではない。むしろ、誘うような手つきに妖しい疼きを感じ、内心で焦ったほどだ。

「もう縛らないから、俺のこと満足させてくれたら、消すよ」

ふふつと笑う声や唇も、妖艶ようえん、といっていいほどなまめかしい。一瞬覗いたピンク色の舌が、あからさまというほどでもなく、けれど男の気をしっかりと惹ひく感じに唇を舐める。

「ギブアンドテイクというわけか」

ため息をついて、直隆はこみあげる不可解な熱を表に出すまいとした。そして、条件をつけてきたことで、むしろ納得したとうなずいてみせる。

「わかった。一言はないな？」



「え……まじで？ いいの？」

真幸は、またもやびっくりしたように目をまるくした。わけのわからない男だ。脅迫してくるくせに、こちらが条件を飲めば驚いて、直隆には意味不明の確認ばかりを口にする。

白黒はつきりつけたい性格の直隆にとっては、いらだたしい話だ。

「で、いつだ。今日か？」

「えー、いや、そうくるんだ……わっ」

直隆は、密着した細い腰に手をあて、ぐいと引き寄せた。細い背中がしなり、驚いたような顔で見あげてくる真幸を睨みつける。

「すればいいんだな？」

「ん……っ」

してやられてばかりなのは業腹ごうはらで、一瞬たりとも目を離さないまま、噛みつくようにキスをした。とたん、またもや真幸は目をしばたかせ、呆然としたような顔をしてみせるから、意味がわからない。

「自分でしろと言ったんだろ。なぜ驚く」

「え、え、まあ、そうなんだけど」

こんなところでキスするなんて——だとか、ごにやごにやとつぶやく真幸に、直隆はますます表情を陰しくした。

「どっちなんだ、わたしは抱けばいいのか、しなくていいのか。はつきりしなさい！」

「えっ、あつ。じゃ、じゃあ、して」

じゃあつてなんだ。煮えきらない真幸に、直隆はなぜ自分が主導権を取っているのか、と内心で首をかしげたが、すぐに答えは見つかった。

かつての婚約者には、やつつけ仕事とまで罵られた。それが、犯罪者まがいに脅してきている相手にはいえ、『よかった』と言われたことで、直隆の、このところズタボロだった。アイドルが——くだらないとは我ながら思うが——ほんのすこしとはいえ、癒されたからだ。

そもそも、相手が男だという点については、いまさら考慮すべきではない。すでにいちど、強制的にとはいえ寝てしまったのだし、可能か不可能かといえば、できるに決まっている。

（なのになにいちぐずって、本当はどうしたいんだ、こいつは？）

直隆は、あまり気の長いほうではない。やると決めたものを撤回するのも不愉快だし、そもそもなぜに脅迫者側がしりごみしているのだ。

（それではやつぱり、わたしがよくなかったみたいじゃないか！）

もはや論点のずれた部分でムキになりながら、直隆は思いきり上から言いきった。

「いいか、条件は飲む。言質<sup>げんち</sup>も取った。だから終わったら、写真は消しなさい」

「あ、う、うん。わかった」

断言してみせると、勢いに吞まれたのか、戸惑ったような顔で彼はこくりとうなずいた。